旅に出たい

旅に出たい

池内紀

池内紀 *Osamu Ikeuchi*

平凡社

旅に出たい

一九九二年十月三十日　初版第一刷発行

著者――池内紀
発行者――下中弘
発行所――株式会社平凡社
〒102　東京都千代田区三番町5番地
☎〇三―三二六五―〇四六五（編集）
〇三―三二六五―〇四五五（営業）
振替（東京）八―一九六三九
印刷――明和印刷株式会社
製本――和田製本工業株式会社

© Osamu Ikeuchi 1992 Printed in Japan
ISBN4-582-82860-4
NDC分類番号914　小B6判（17.6cm）　総ページ224

1,400円

乱丁・落丁本のお取替えは、直接小社読者サービス係までお送り下さい。
送料は小社で負担いたします。

旅に出たい

旅に出たい

池内紀

池内紀 *Osamu Ikeuchi*

平凡社

平凡社

旅に出たい・目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

尾張名古屋は船乗りの碑を訪ねるの巻　10
幻の貝を求めて相州江の島をさまようの巻　18
『八犬伝』を道案内に、南房総を駆けめぐるの巻　26
近江王朝の跡を巡ってキクズ風呂に入り損なうの巻　35
西上州はタコ、馬、コンニャクとはなんじゃいの巻　44
越後出雲崎の海山のあわいでいにしえの神々とまぐわるの巻　52
駿州で松江を見つけ、甘くせつない過去といきあわせるの巻　61

海山のかなた、胸の薬師の壺中天に韋駄天走りにとびこむの巻　70
どじょうすくいと鹿之介の兜をめぐり遊子あたまを悩ますの巻　78
地図をにらみ、金山衆のあとを追って奥大井の山に消えるの巻　87
花のお江戸はこんにゃくえんまをふりだしに、小石川冥途の旅の巻　96
いとしのローザと運河の町を流れただよう夢幻旅　105
妙義、榛名をしたがえて椿園先生、幻影城下を行く　115
燃える石、燃える水、馬の国探訪記　123

むこう通るはお夏じゃないか、ああ、ふるさと夢紀行　131
有磯の海の波まくら、魚啼きスッポンの目に涙　140
土は燃えろ、石は叫べ、焼きもの国遊覧記　149
金比羅船々　追風に帆かけて　讃岐路は万年筆奉納の旅　157
人の一念岩をも通す恩讐の彼方の思い出旅　166
公園のベンチでメフィストフェレスが長広舌を振るうの巻　174
ハイ、どんどはれ、遠野夢街道冬景色の巻　183

七十五人で船出をしたが……海賊島探検記　193
風に吹かれて流れ花　飛驒三界をからくり旅　203
洞海湾に波高し山上軍艦集結す　212
あとがき　221

装幀および地図＝田淵裕一

旅に出たい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

尾張名古屋は
船乗りの碑を訪ねるの巻

笠寺はすぐにわかった。問題は成福寺である。

「ジョーフクジ。ジョーフクジねェ」

名古屋駅の観光案内所のおばさんは地図をにらんでひと思案した。

「白鳥(しらとり)町といって、熱田神宮の西側らしいんです」

「名古屋はイッパイお寺があるからねェ。白鳥町にもこんなに沢山あるのよ」

区分地図をひらいてくれた。なるほど、卍のマークがひしめいている。

近くまで行ってたずねることにして、とにかく名鉄に乗って本笠寺(もとかさでら)駅でおりた。日曜日の昼下がり。いまにも泣き出しそうな空模様。すしと団子とソフトクリームという不思議

な組み合わせの店の前に列ができている。笠寺薬局の前で思わず足がとまった。看板にいわく「右スグ笠寺温泉」。なァに、これはこちらの風習で、ただの銭湯でありますよ。

雨ざらしの観音さまに笠をさしかけたのが玉照姫、その故事にちなんで正式には天林山笠覆寺。天平年間に開基をもつ古い寺である。説明板を見ていたら、ポツリポツリと雨が落ちてきた。鳥打帽とジャンパーに運動靴といった珍妙ないでたちの男には、傘さしかける人もいない。首をすぼめてお堂に駆けこむ。

「おろうそく、五百円、千円、三千円」

何がどう違うのだ。

ともあれ形ばかり手を合わせた。

「あたまがよくなりますように」

肥ったおばあさんが、おびんずる様を撫でた手で孫の頭を撫でている。

「ろくすけは、ホラ、これでもう大丈夫」

手をつないで、トットとお堂を下っていった。願かけの絵馬が風にあおられ、カン高い音をたてていた。門前の池で何十ものカメが、てんでに首をのばしていた。

文政四年（一八二一）三月、この笠寺でちょっとした見世物があった。よしずを引きま

わした入口の貼り紙にいわく、「魯西亜国衣類器物披露」。入口の横手に受付のような机を置いて、一人の男がすわっていた。骨太の肩に羽織をはおって、神妙な顔つきで控えている。色黒で、眉が太い。まだそれほどの齢でもなさそうなのに頭はゴマ塩、削いだようにアゴが張っている。客の入りの悪さを気にするでもなく、じっと腕組みしてすわっていた。寺の和尚が通りかかると、腰をあげて丁寧に会釈をした。

当時、この尾張名古屋に小寺玉晁という筆まめな人がいて、毎日のように書きとめたのが『見世物雑志』。そのなかにこんなくだりがある。

「先だって吹流されし候の知多郡半田村重吉、異国にて貰ひうけし衣類道具等見する也。乗合の者十二人死候、其石塔を立てんこと心願にて、一人前一文づつのわりにて十二銅づつ志を請ふ」

尾張国御廻船督乗丸の漂流については池田寛親による聞き書きがあり、石井研堂が帝国文庫の『漂流奇談全集』（明治三十三年）に収めてより一般に知られた。督乗丸は千二百石積み、船長重吉ほか、あわせて十五人が乗り組んで、知多半島南端の師崎を出たのが文化十年（一八一三）十月、江戸に着いて御廻米を納め、かわりに大豆七百俵と道具類を積んで江戸を出帆、伊豆の子浦に寄って、翌月四日、子浦を出て尾張へ向かった。御前崎ま

で二十里のところに来たとき、にわかに丑寅の風が起こった。今でいう台風に巻きこまれたのだろう。木の葉のようにもまれもまれて、やがて楫は折れ、帆柱を失い、沖へ沖へと流されていく。八日の朝、うっすらと山らしい山を見たのが見おさめ。以来、十七ヵ月に及ぶ長い長い漂流がはじまった。

ときに重吉、数えで二十九歳。三河湾の佐久島の生まれ。十五の時に船乗りになり尾州半田村の庄兵衛の養子になった。

「重吉つらつら思うに、霜月の末つ方より、暑気強くなり来たり、朝たきたる飯の、昼にもなれば、そこなうは、赤道下へ来たるおりならん」

のちの推定によれば伊豆諸島から南へ流され、そのあと赤道にそって東流する赤道逆流によって左に転じ、ひたすら東へ流されたらしい。はてはメキシコ近くまで漂った。

翌年五月から六月のこと、それまで雨水を飲み、積荷の大豆を食料として歯をくいしばってきたところ、気力いちどに萎えたのだろう、壮絶な記述がつづく。

五月八日、水夫の七兵衛が死んだ。十六日、楫取り藤助が死んだ。二十八日、房次郎が死んだ。これは走り使いにあずかった少年で、まだ十六歳だった。六月十二日、水夫の庄兵衛が死んだ。同日、福松が死んだ。十三日、孫三郎が死んだ。十六日、為吉死去。十八

日、三之助死ぬ。二十日、重蔵が死んだ。二十八日、安兵衛が死んだ。たてつづけに十人が死んだ。死体を海に流すにしのびず、重吉は寝起きする次の間に並べておいた。

いよいよ海に流すと心に決めたとき、死骸に向かってこう語りかけた。もしどこかへ漂着したら土に葬りたい一心から、これまで船中に残してきたが、やはり「汚れもの」をこれ以上、船に置くわけにいかない。

「今は力なく海中へ捨つるなり。されども今までかくて置いたる事にしあれば、さるにても汝ら陸へ葬られたく思うならば、夢に来たりてその由を告げよ」

ひと月待とう。水葬がイヤなら、どうか夢に出てこい。

きっかり、ひと月待った。しかし、「さる夢も見ざりければ」、ある日、夕日の入るのを待って十の死骸を海に捨てた。むくろの肉は「干かたまり」、頭はされこうべとなって、手をそえると、はらはらとくだけたという。土をはこぶようにして海に捨てた。そのとき重吉は、もし生き残って故郷に帰ることがあれば、たとえ門口に立って物乞いをし、寒念仏を唱えあるいても、大いなる石碑を建てようと心に誓った。

生き残った三人がイギリス商船に助けられ、カムチャツカ経由で帰国するのが文化十三年（一八一六）、重吉は懐かしい半田村に帰り着いたとき、妻子、親類すべてを遠ざけ、

村の氏神や金刀比羅さまの社にこもった。しばらくは誰とも、ひとことも口をきかなかったという。

ひと月ほどして尾張藩に召し出された。海上での行為の褒賞として武士にとりたてられ、小栗の姓をいただいたが、まもなく辞職。その後の重吉は供養塔建立のことしか頭になかったようである。異国の品を見せて奉加を乞うのは禁に触れたが、あえて寺から寺をまわって一紙半銭の助力を請うた。ようよう二十両ためて、文政七年、念願の碑を建てた。池田寛親の『船長日記』のさし絵によると、台石の上に死んだ十二人の戒名、忌日、出身地などを刻んだ角石を置き、その上に荒れ狂う波をかたどった石を横たえ、さらにその波の上に督乗丸を模した石を据え、帆柱の立つところに「南無阿弥陀仏」の名号を刻んだ円柱形の石を立てた。いかにも船乗りの供養碑にふさわしい。

たしかに笠寺の観音堂の前に建てられた。しかし、ほどなく無縁仏あつかいされて、境内に放り出されていた。どうやら重吉が永代供養料を怠ったせいらしい。成福寺四代歸山和尚がこれを見て大いに悲しみ、熱田の成福寺に移した。

名鉄で熱田神宮前まで引き返した。日曜日の大安吉日、神宮前は結婚式で大賑わい。よけいなことだが、今日の船出が永の漂流に至らぬことを。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo